

めながら下方に至り、下端は直截している。

墨書が肉眼で確認できたのは、(1) (5) (9) (11) (12) (16)で、他は赤外線観察及び墨痕により文字が確認できた。文字は各本につきすべて片面のみに一字ずつ記され、(1)を除き種子はすべて「𪛗」（金剛界大日如来）と確認できる。発掘時に二次的な削りを受けた(1)も同じ種子と推定される。

今回出土した資料は、形状・法量・種子に共通性があり、性格としては今のところ笹塔婆あるいは呪符の類と想定される。

本資料については國學院大學の千々和到氏、元興寺文化財研究所の藤澤典彦氏のご教示を得た。

（堀 耕平）

宮城・山王遺跡 さんのう

- 1 所在地 宮城県多賀城市南宮字八幡・町・伊勢
- 2 調査期間 一九九五年（平7）四月～二月
一九九六年（平8）四月～二月
- 3 発掘機関 宮城県教育委員会
- 4 調査担当者 加藤道男・斎藤吉弘・村田晃一・早川英紀・八嶋伸明・星 清・東理浩明
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



山王遺跡は奈良・平安時代を通じて陸奥国府であった多賀城跡の南西部に位置する。砂押川と七北田川によって形成された標高五～六mの東西に長い自然堤防上に立地している。その北側は低湿地、南側は微高地と低湿地が複雑に分布して

いる。東に隣接する市川橋遺跡、西の新田遺跡とも同じ自然堤防上に立地する。

発掘調査は一九七八年以来、宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会によって継続的に行なわれ、弥生時代から江戸時代にわたる多数の遺構や遺物が確認されている。その結果、多賀城外の南面には平安時代前半に東西大路、南北大路を基準とした道路による方格地割が施行されており、その内部には道路とほぼ方向をそろえた掘立柱建物を主体とする住居や工房、倉庫、井戸などの諸施設が営まれたことがわかってきている。

地割内部は大路沿いの区域と大路から離れた区域では使われ方が異なる。前者は方一町相当の敷地全部を使い、廂付大型建物を中心として各施設が配された上級官人の官舎街として利用されている。

後者は敷地内部を道路や堀、溝で細分し、建物は小規模なものが主体となる。下級官人の住居や多賀城に関わる作業場、およびそれを支えた階層の低い人々の生活の場であったと考えられている。さらに、方格地割以外の地域でもこうした諸施設が多数発見されており、多賀城周辺では九世紀前後に方格地割の施行や諸施設の配置、周辺集落の増加・拡大といった都市計画的な整備が行なわれている。一九九五、一九九六年度は八幡地区北西部（方格地割図中の1。以下同様）から伊勢地区（2）、町地区（3）の調査を行なった。

まず、奈良・平安時代の遺構について説明する。町地区や伊勢地



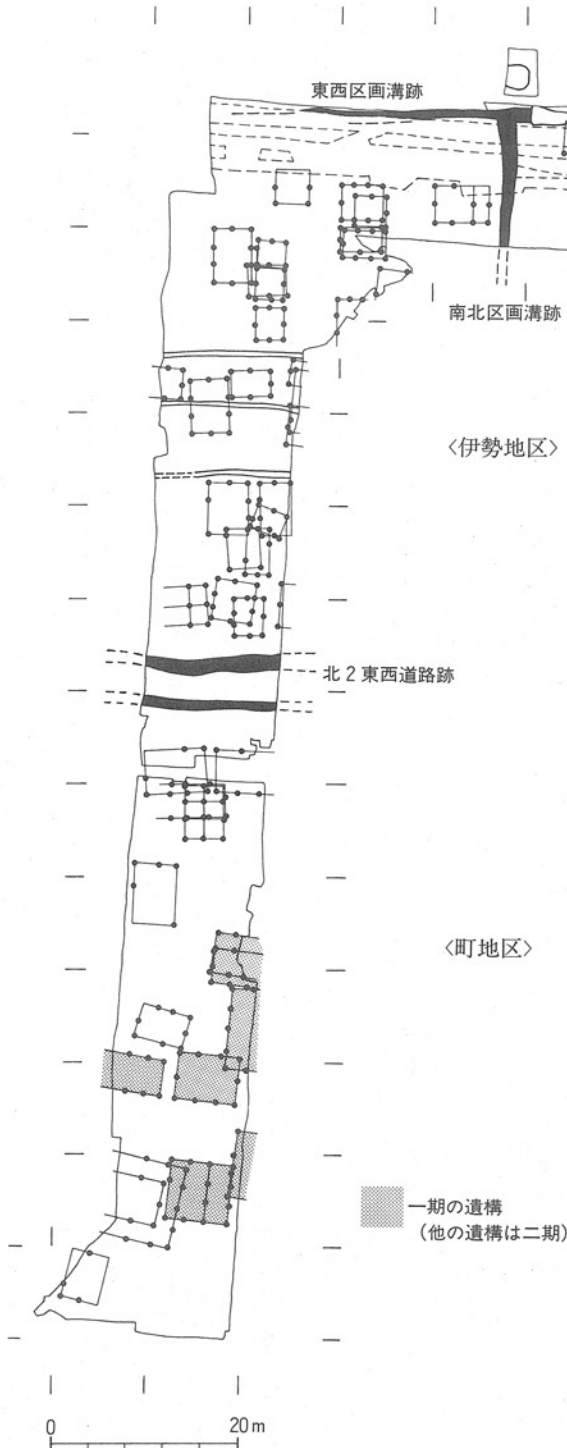
多賀城南面の方格地割

区は西九南北道路跡から西へ約二〇〇m、八幡地区北西部は北二東西道路跡から北に八〇～一二〇m離れている。調査の結果、町・伊勢地区は標高が五～六mあり、八世紀後半から一〇世紀前半の遺構を多数検出した。また、伊勢地区南端では道路跡を確認した。この道路は位置や方向、規模から北二東西道路と考えられる。

一方、八幡地区北西部は標高が四m前後と低く、比較的高い部分が耕作域として利用され、より低い部分は湿地であることがわかつ

た。いずれの調査区でも道路跡は検出できず、西六・七・八・九南北道路は北二東西道路より北にはつくりられていないと考えられる。

町・伊勢地区の遺構は北二東西道路建設前の九世紀中頃以前（一期）、道路機能時の九世紀後半から一〇世紀前半頃（二期）、道路廃絶後の一〇世紀中頃以降（三期）に分けられる。三期の遺構は畑が主であり、ほかに土坑や溝がある。一期の遺構は町地区の南半部に集中する（検出遺構図参照）。これらは主に九世紀前半から中頃の



町・伊勢地区の検出遺構

ものである。掘立柱建物は七棟あり、なかには廂付のものや柱筋をそろえて建つものがある。このうちの一棟を壊す土坑（九世紀中頃）から「館」「東」「玉」などと記された墨書土器が出土している。

二期になると、伊勢地区に東西道路が建設される。その北五八mの地点には道路と方向をそろえた東西溝、さらに両者をつなぐ南北溝がつくられ、敷地内部を細分している。この南北溝の西側は掘立柱建物を中心とした居住域、東側は主に耕作域として利用されている。

掘立柱建物は町地区から伊勢地区の南北溝西側にかけて三六棟検出している。とくに町地区南半部には三面以上に廂をもつ大型の建物がある。これに対し、伊勢地区の建物は二×三間以下の小型の建物が主体であり、道路の南と北では建物のあり方に大きな違いが認められる。この時期の文字資料としては、伊勢地区の一〇世紀前半の区画溝や土坑から出土した「大万」の墨書土器がある。

九世紀前半に町地区南半部に建物群がつくられた背景としては、八世紀末頃の東西大路の完成とこれにつづく東西大路をはさむ南北一区画ずつの方格地割の形成があげられる。以後この場所は継続的に建物群がつくられる。九世紀後半になると、北二東西道路が建設されるとともに伊勢地区では区画溝がつくられ、それらに規制された掘立柱建物が多数出現する。町地区でも北二道路沿いにあたる北端に掘立柱建物がつくられる。したがって、現在のところ南北道路

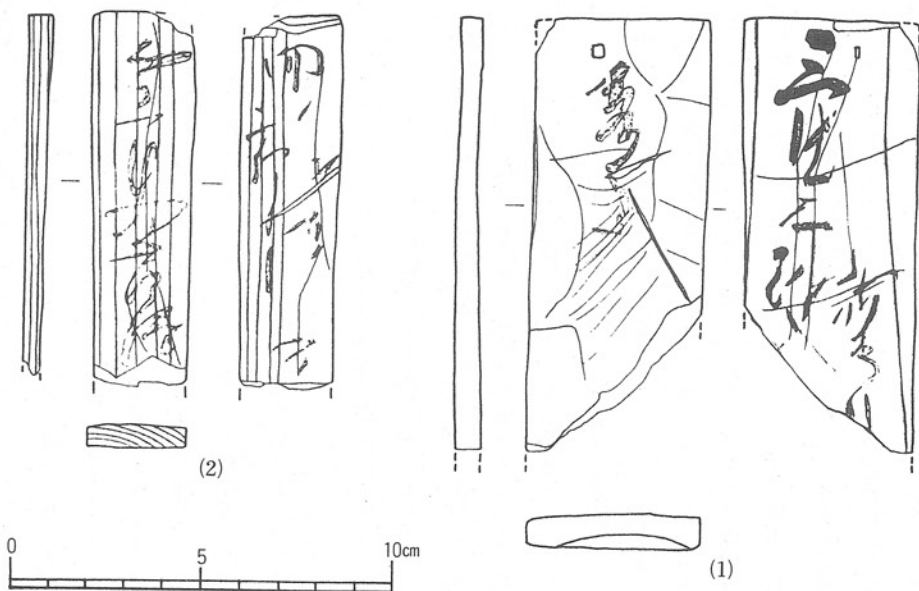
は確認されていないが、方格地割の範囲は従来考えられていた西九南北道路よりさらに西に延びると考えられる。

町地区の南半部は一・二期をとおして廂付を含む大型の建物群がつくられる。これらは一般の居住施設とは異なり、より格式の高い建物群と考えられる。奢侈品である灰釉陶器はこの部分からのみ出土していること、一期の土坑に「館」の墨書土器があることはその性格を示唆するものとみられる。

次に、江戸時代の遺構は町地区から伊勢地区南側に分布する。調査区の南側には中世から続く街道が通っており、今回の調査では道路に沿った下級武士の屋敷地を確認した。敷地割りは街道に面した部分（東西）が狭く、奥行（南北）が長い。西側は両岸に杭を打ち並べ、枝や廃材で護岸された堀で区画されている。

屋敷地では、内部を細分する溝や掘立柱建物、井戸、池、ゴミ捨て穴などを検出している。建物跡は街道より主屋と考えられる大型建物を中心として、周囲に雑舎が配される。遺構の年代は、陶磁器類の年代観から一八世紀後半から一九世紀代と考えられる。

遺物は堀や池から多く出土している。陶磁器類・土師質土器・瓦質土器・銭貨・木製品・瓦などがあり、とくに陶磁器類と木製品が多い。また、ゴミ捨て穴からはイネ・ソバ・ヒユ属・ノブドウ属・ウリ属・ナス属・シソ属の種子が出土しており、当時の食生活の一端を知ることができた。木簡は一九世紀代の堀から二点出土



している。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「○ 粃
三斗三升入

・「○ □ □

(113)×46×10 019

(2) ・「□ □ □ □ □ □ □ □

・「□ □ □ □ □ □ □ □

(99)×26×7 019

(1)は下半部が欠損しており、墨痕は不明瞭である。上部に径1mmの穿孔がある。形態や穿孔、内容から荷札の可能性が高い。(2)も下半部が欠損する。墨痕が不明瞭で、内容は判読できない。形態が(1)と似ていることから荷札と思われる。

(村田晃一・吉野 武・八嶋伸明)